第一章：秘めた想い、解かれる髪

特急列車がトンネルを抜けるたび、車窓を流れる景色は鮮やかな緑から、渋い山肌へと色を変えていった。

隣に座るリゼは、まるでこれから大事な試験に向かう学生のように、背筋をぴんと伸ばして座席に深く腰かけている。紫がかった漆黒のツインテールが、リズミカルな電車の揺れに合わせてわずかに揺れる。

「どうかした？　そんなに緊張して」

そう声をかけると、リゼは少しだけ吊り上がった、鋭い目つきのまま視線だけをこっちによこした。キリッとした表情は、いつもの厳しい雰囲気を保っているけれど、よく見るとわずかに頬が緩んでいるのがわかる。

「緊張などしていない。これは、特別な場所へ行くための、最低限の心構えだ」

「特別な場所って、単なる温泉旅行だよ」

「単なる、だと？　……ふざけるな」

リゼは小さく舌打ちし、ポケットに手を突っ込んだ。

「いいか。これは、二人きりの密室で、普段の生活から離れ、互いの気持ちを深く探り合う、大事な時間だ」

「大事な時間って、ただのイチャイチャ旅行でしょ？」

「だ、か、ら！　そのイチャイチャとやらを遂行するには、緻密な計画と強靭な精神力、そして何よりも、この目的に対する覚悟が必要なんだ！」

言葉は男勝りで大げさだけれど、そのストイックな性格と、真面目すぎる思考回路が、リゼにとっての「旅行」の解釈なんだろう。

「そっか。じゃあ、成功のためには、どうしたらいい？」

わざと真面目な顔をして問いかけると、リゼは一瞬、はっとしたように口を噤んだ。そ

の真剣な表情には、普通の女の子が持つ「恥ずかしい」という感情が、プライドとせめぎ合っているのが見て取れる。

「それは……。まず、道中では、体力の温存を最優先する。そして、旅館到着後は、部屋の配置と設備を速やかに確認し、……ふたりきりの時間までのスケジュールを練り上げなければ」

「ふたりきりの時間って、何をするの？」

「……雰囲気に、流されるんだ」

リゼは、少し顔を赤らめて言い直した。そして、ふいに、少しだけ寂しそうな、それでいて切実な眼差しで、こちらを見つめた。

「あのさ……」

「ん？」

「……その……普通の、恋人同士みたいな会話って、どうすればいいんだ？　……ココアやチノたちがしてるような、あの、こう、ゆるい感じの」

リゼは、普段隠している「普通の女の子」への憧れを、この二人きりの空間で、ほんの少しだけ漏らした。それは、彼女の強固な「鎧」の隙間から見えた、柔らかい素肌のようなものだ。

「リゼは、今のままで十分普通の女の子だよ。むしろ、護身術ができて、なんでも真面目に考えるリゼの方が、個性的で魅力的だ」

「む……そう、か。だが……」

「……到着したら、まずは浴衣に着替えよう。あの浴衣、リゼに似合うかな」

リゼの関心をそちらに向けさせると、彼女の表情がパッと明るくなった。

「ふむ。旅館の提供する衣装を確認するのは重要だ。ただし、サイズが問題だな」

「サイズ？」

「……胸元が、な」

リゼは、視線をわずかに下に向けた。その先には、シャツの生地をパツンと張り裂けんばかりに主張している、豊満な曲線がある。そのギャップが、リゼの魅力の一つだ。

「大丈夫だよ。旅館の浴衣は、たいていサイズが選べるようになってる」

「そうか……ふっ、さすがに老舗旅館の備品は優秀だな。よし、これで楽しみが増えた」

やがて、列車は目的地の温泉駅に到着した。

駅舎を出ると、目の前に堂々とした佇まいの老舗旅館「月影楼（つきかげろう）」が見えた。

「……ふむ。これは、想定以上に立派な建物だ。内部の設備は期待できそうだぞ」

「だから、旅館だってば。ほら、送迎の車が来てるよ」

仲居さんの案内に従って、最上階の特別室に通された。部屋のドアが開いた瞬間、思わず二人とも息を呑む。

広々とした和室の窓の外には、壮大な山々と、その裾野を流れる清流が一望できた。そして何より、部屋の一角には、露天風呂が備え付けられていた。

「すごい……」

リゼが、初めて固い言葉を使わずに、素直な感想を漏らした。
荷物を置くのも忘れて、窓際の縁側まで歩み寄る。

「……この部屋は、最高の隠れ家になるな」

……やっぱり、そうなるか。

「見て！　露天風呂もあるよ」
「確認した。個室の温泉とは、これは素晴らしい設備だ。外部を気にせず、長時間、体力の回復と、精神的なリラックスを図ることができる」

仲居さんが去り、二人きりになると、リゼはすぐに立ち上がった。

「さあ、着替えからだ」

「浴衣に着替えるってことね」

部屋の隅にある棚を開けると、色違いの浴衣が数種類入っていた。

「ふむ。浴衣の色は、青、灰色、そして……桜色、だと？」

リゼが指さしたのは、淡いピンクの、いかにも普通の女の子らしい色だ。

「これは、少し迷う。この桜色は、私らしくない。だが、……待てよ」

リゼは、桜色の浴衣を手に取り、そっと胸元に当てた。キリッとした表情と、淡いピンク色のコントラストが、なんとも言えない愛らしさを醸し出している。

「……たまには、こういう服も悪くないかもしれない。雰囲気を和らげることができる」
「ただ着たいだけでしょ」
「ち、違う！　これは、カモフラージュだ！　……違うか？」

自信なさげに俺の顔を窺うリゼの表情は、完全に「普通の女の子」のそれだった。

「着たいなら、着ればいいじゃん。絶対似合うよ」
「……そ、そうか。そ、では、この衣装を選択する」

リゼは、決意したかのように、力強く頷いた。そして、着替えのために襖の向こうの洗面所へ向かった。

五分ほど経っただろうか。カチャリ、と襖が開く音がした。

正直、息を呑んだ。
彼女は、まず、トレードマークのツインテールを解いていた。紫がかった黒髪が、波打

つように肩から流れ落ち、その毛先は、腰のあたりにまで達している。長い髪が、普段の鋭い目つきを、どこか憂いを帯びた、色っぽいものに変えていた。

そして、桜色の浴衣。

淡い色が、彼女の白い肌を際立たせ、その身体のラインを、明確に強調している。

特に、胸元だ。浴衣の合わせ目から、その豊かな肉付きが、強烈な存在感を放っている。

リゼは、少し照れているのか、視線を泳がせながら、部屋の中央まで歩いてくる。

「どうだ？　この……衣装は」

「……完璧、だよ。今まで見たリゼの中で、一番……その、魅力的だ」

「可愛らしく見られたい」という、リゼが隠そうとしている「女の子」の気持ちが、表情の端々から漏れ出していた。

「そ、そうか。ふふん。これで、この温泉旅行の目的は、半分成功したようなものだな」

得意げに鼻を鳴らすリゼだが、その耳はほんのり赤く染まっている。

「さあ、そっちも着替える番だ」

促され、俺も浴衣に着替える。地味な紺色の浴衣を選んで、部屋に戻ると、リゼは正座して俺を待っていた。

「ふむ。これで、私たちは、完全にリラックスエリアにいることになる」

「二人だけだけどね」

俺がリゼの隣に座ると、彼女は、すっと距離を詰めてきた。浴衣越しの体温が、じんわりと伝わってきた。

「……な」

リゼが、俺の膝の上に、長い黒髪の一部を乗せるようにして、甘えるように問いかけてくる。

「何？」

「……似合ってるか？」

「うん。すごく。本当に可愛い。なんで普段、こういう服を着ないの？」

「だ、だって……私には、合わないだろう。男勝りな私が、こんな……ふわふわしたものを着ていたら、周りに笑われる」

「誰も笑わないよ。リゼは可愛いものが好きで、本当は甘えたいってこと、知ってる」

俺は、リゼの長く解かれた髪に、そっと指を滑らせた。腰まで届くその髪は、絹糸のようにサラサラとしていて、指の間を心地よく流れていく。

「な、……触るな！　この髪は、邪魔になるから、普段は結んでいるんだ。この長さは、無

防備さを高める！」

口では反発するリゼだが、俺の指が髪を撫でるのをやめようとしない。むしろ、少しだけ身体を傾け、撫でられやすいようにしている。

「敵なんていないよ。いるのは、私だけだ」

そう言って、俺はリゼの頬に手を添えた。普段のキリッとした表情が、少しだけ崩れ、潤んだ瞳が俺を見つめ返している。

「……な。……やめろ、落ち着かなくなる」

その言葉とは裏腹に、リゼは目を閉じ、俺の手に頬を擦り付けた。

「でも、こういうのって、普通の女の子は、もっとこう……なんていうか、甘い言葉をささやくんだろ？」

「リゼがささやけばいい」
「私が？　……どうすればいいか、わからない。経験がない領域だ」
「たとえば……」
俺は、リゼの耳元に唇を近づけた。
「……ずっと、こうしていたい、とか」
リゼの体が、ビクッと跳ねた。耳元に触れた俺の息遣いに、全身の規律が乱されたようだ。
「ば、馬鹿な！　そんな感傷的な言葉は、……不要だ！　……だいたい、温泉に入ったら、また状況は変わるんだ。その間、どうするつもりだ」
「じゃあ、温泉に入るまで、ずっとこうしていようよ」
リゼは、俺の言葉に、大きく目を見開いた。そして、やがて、その口元に、ふにゃりと

した、見たことのない笑みが浮かんだ。それは、甘く、柔らかな、ただの「女の子」の笑みだった。

「……ふん。いいだろう。その、緩い計画に乗ってやる」

そう言って、リゼは再び俺に身体を寄せた。今度は、さっきよりもずっと強く。
浴衣越しの体温が、じんわりと重なる。リゼの大きな胸が、俺の腕に柔らかく押し付けられる感触がした。

「……な、……」

リゼは、ただ甘えるように、吐息のような声でそう呟く。
俺は、彼女の長い髪を撫でながら、そっとその肩を抱き寄せた。

「この旅、成功させよう」
「……当たり前だ。私は、楽しく過ごす」

そう強がるリゼの声は、もうほとんど、甘い吐息に変わっていた。
俺は、抱き寄せたリゼの大きな胸に、そっと手を触れた。

「ん……っ！」

リゼの全身が、再び大きく跳ねた。彼女のキリッとした表情が、一瞬で溶けて、熱っぽいものに変わる。

「……なっ、それは……、その衣装の……予期せぬ、接触……」

顔を真っ赤にして、言い訳をしようとするリゼが、とても愛しい。

「リゼの胸、すごいね。温泉入ったら、もっと見せてくれる？」
「……ば、馬鹿！　それは、入浴の……終盤で、確認する項目だ！　今は、その……、その、接触は、中断！」

そうは言うものの、リゼは俺の手を振り払おうとはしない。むしろ、俺の手に、彼女の熱い胸が、さらに強く押し付けられてきた。

「この旅、本当に成功させたいんでしょ？」

「……もちろん、だ」

「じゃあ、もう少し、甘えてごらん。リゼの好きなように」

リゼは、意を決したように、俺の首に両腕を回し、顔を俺の肩に埋めた。

「……な、……」

彼女の長い髪が、俺の首筋をくすぐる。甘い浴衣の香りと、リゼ自身の体温が混ざり合い、強烈な誘惑となって俺の理性を揺さぶった。

「……たまには、こうして……、無防備になるのも、悪くない。……いや、いい。……すご

く、いい……」

「すごく可愛いよ、リゼ」

俺がそう言うと、リゼは顔を上げ、俺の瞳をじっと見つめた。

「……な。褒めるな。……鼓動が速くなるような言動は……禁止だ」

そう言いながら、リゼは俺の唇に、そっと自分の唇を重ねてきた。

それは、純粋な、衝動的なキスだった。甘く、熱い、温泉旅行の始まりを告げる、初めてのキス。

長い、長いキスを終えて、リゼは少し息を切らしながら、俺の肩にもたれかかった。

「……行動、開始だ」

リゼの瞳は、夕焼けの色を映して、キラキラと輝いていた。

そして、障子の向こうから、仲居さんの声が聞こえてきた。

「お客様、お食事の準備が整いました。いかがいたしましょうか」

「……ちっ。休憩だ」

リゼは名残惜しそうに俺から離れ、立ち上がった。その浴衣姿は、さっきよりもずっと、俺の目に焼き付いている。

「温泉は、食後にするか？」

「ああ。夜は長い。……入浴は、夜に行う。その、……後の、時間のために、体力を温存しなければ」

リゼは、俺に向かって、満足そうに笑った。

その笑顔は、まさに「鎧」を脱ぎ捨てた、リゼ・ドラクロアの、秘密の顔だった。

第二章：月夜の誘惑、素肌のぬくもり

仲居さんの声で中断された甘い時間は、夕食の準備が整ったという現実に戻された。リゼは、慌てて俺の肩から離れた。しかし、その瞳には、すでに情熱という名の炎が宿っている。

「ち、ちっ。食事とは、予想外のタイミングで入った休憩だな」

「休憩じゃなくて、食事だよ。せっかくの美味しい料理、楽しまなきゃ」

運ばれてきたのは、豪華な会席料理だった。リゼは、「楽しむためのエネルギー補充」と割り切ったのか、桜色の浴衣姿で、箸を勢いよく進めている。

「ふむ……この地の食事は優秀だ。元気を出すには効率がいい」

そう言って、リゼは少し照れくさそうに微笑んだ。

「それに、この酒……」

リゼは、小さな猪口を手に取り、香りを楽しんでいる。

「旅館の隠し玉だな。……これを摂取すれば、普段の理性がさらに緩み、夜の時間が格段に楽しくなる。いいか、な。これも、雰囲気を高めるための手段だ」

食事中も、リゼは甘えん坊だった。

「な、……それ、一口くれ」

彼女は、俺の皿に置かれた煮物を、目で要求してきた。

俺が煮物をリゼの口に運ぶと、彼女は上目遣いで、満足そうに頷いた。

「ふむ。……感謝する」

口の中を動かすたびに、彼女の浴衣の胸元がわずかに揺れる。淡い桜色の生地が、照明の光を吸い込み、彼女の豊かな曲線を、生々しく浮き彫りにしていた。

食事が終わり、布団が敷かれ、仲居さんが部屋を去ると、再び二人きりの密室が訪れた。

「よし。いよいよ、入浴の時間だ」

リゼは、まるで号令をかけるように立ち上がった。その目は、少しだけアルコールに潤み、普段よりも大胆な光を宿している。

「待ってたよ」

「ふふん。待たせたな。体力を温存し、夜の静かな時間を見計らって、一気に楽しむ。これが、私たちのやり方だ」

リゼは、風呂に向かう前に、俺のそばに立ち止まった。そして、そっと俺の頬に手を触れる。

「……な。だが、今回の目的は、我慢比べではない」
「じゃあ、何？」
彼女は、少し顔を赤らめて、長い髪を揺らした。
「……共同での、心の解放、だ」
その言葉は、とても甘美に聞こえた。
部屋の露天風呂は、月明かりと、庭園のわずかな照明に照らされ、幻想的な雰囲気を醸し出していた。
「湯温は、最適だ。これは、最高の環境と判断する」
リゼは、浴衣を脱ぐ前に、まず部屋の入り口に目をやり、鍵がしっかりと閉まっている

ことを確認した。
そして、彼女は、いよいよその「衣装」を解き放つ。
帯をほどき、桜色の浴衣を、音もなく滑らせていく。
露わになったリゼの裸身に、俺は再び息を呑んだ。
月光の下、彼女の白い肌は、透き通るような輝きを放っている。引き締まっていて美しい体幹。だが、その胸部は、そのストイックな肉体からは想像できないほど、豊満だった。
リゼは、俺の視線を受けて、恥ずかしがるどころか、むしろ得意げに胸を張った。
「どうだ、な。これが、私の……最大の魅力だ」
彼女は、その大きな胸を両手で包み込むようにして、自慢するように揺らした。湯気の向こうで、その乳房が魅惑的に光る。

「……な。この体は、すべて愛を抱擁するためにある」
「抱擁？」
「ああ。この圧倒的な大きさは、優しさを与える最高のカモフラージュであると同時に、抱擁の際には、最大のぬくもりとなる」
「……触ってみるか？」

リゼは、冗談めかして言ったが、その瞳は真剣だ。

「もちろん」

俺は、彼女の裸に触れる前に、自分の浴衣も脱ぎ捨てた。
湯船に足を踏み入れると、温かい湯が身体を包む。リゼは、先に湯船の縁に腰掛けて、俺を待っていた。
俺が湯船に身を沈めると、リゼはすぐに俺の腕の中に滑り込んできた。湯の中で、二人の体がぴたりと密着する。

「な……！　近すぎる。これは、想定外の距離だぞ」

そう言いながらも、リゼは決して離れようとしない。むしろ、俺の胸に、自身の豊かな胸を押し付けてきた。

「想定なんて、ここでは関係ない」

湯に浸かった彼女の胸は、水圧でさらに持ち上げられ、湯の表面に柔らかく浮かんでいる。

「ふ、ふん。この水圧は、胸の形をより際立たせる効果があるな。……これも、雰囲気を高める要素だ」

リゼは、湯の中で自らの胸を優しく撫でた。

「リゼの胸は、本当にすごい」
「……当たり前だ。私の体は、すべて愛情を込めて育まれている。その成果が、ここにも現れているというわけだ」
リゼは誇らしげに胸を張り、俺の耳元で、甘い吐息と共に囁いた。
「な、……触れていい。この肌が、どれほど温かくて、そして……どれほど、な、……熱いか、確認してみろ」
俺は、湯の中で、リゼの柔らかな胸に手を伸ばした。
湯の温度よりも、ずっと熱い。その肌の質感は、驚くほど滑らかで、柔らかかった。
「ん……っ、な……！」
リゼの口から、抑えきれない、甘い吐息が漏れた。

「やめろ……。集中力が、……この快感は、この時間を、致命的に、乱してしまう……」

リゼは、理性の言葉を口にしながらも、俺の手を押し返すことはしない。むしろ、その胸を俺の手に、さらに深く押し付けてきた。

俺は、その大きく、豊満な胸を、湯の中で優しく揉みしだいた。

「……はぁっ、な、……だめだ……。湯の中で、こんな……、な、無防備になるなんて……」

リゼの体は震え、その瞳は、情欲に濡れていた。

「リゼは、可愛い」

「……っ、褒めるな！　その、……言葉は、私を、さらに……、その、無防備にさせる……」

リゼは、自分の長い髪を、俺の首に巻きつけるようにして、しがみついてきた。

「無防備でいい。ここでは、ただの女の子になればいい」

俺は、湯の中からリゼの身体を抱き上げ、湯船の縁に浅く座らせた。冷たい夜風が、湯から上がった彼女の濡れた肌を撫でる。その寒さと、俺の熱が、彼女の快感を増幅させた。

湯気の中で、リゼは再び、俺にキスを求めてきた。今度は、互いの欲望を確かめ合うような、深く、熱いキスだった。

「んんっ……、な……、はぁっ……」

キスが途切れるたびに、リゼは荒い息を吐き出す。

「どうだ、リゼ。この、親密な時間は」

「……っ、ふざけるな！　我慢、などという生易しいものでは、ない……。これは、完全に……、な、……愛だ……」

俺は、湯の縁に座らせたリゼの膝を、そっと開かせた。

「もっと愛し合いたい？」
「……決まっているだろう」

リゼは、自分の濡れた指を、俺の顔に這わせた。

「な、……秘密の場所に……。そして、私の……、私の、一番無防備な場所を、な、……見せてやる」

リゼの瞳は、月光よりも強く輝き、その口元は、完全に緩みきっていた。
俺は、リゼの太ももに手を這わせ、そのまま、彼女の秘密の場所へと、ゆっくりと指を滑り込ませた。

「んぁっ……！」

リゼの体が、硬直した。そして、その腰が、湯気の中で小刻みに震え始める。

「な……、そこは……、不意打ちは、卑怯だ……！」
「卑怯でいい。早く、リゼを夢中にさせたい」

俺が指を動かすたびに、リゼの全身から力が抜け、甘い嬌声が湯気に乗って広がる。

「んっ、はぁ、……な、……だめだ……。ここで、限界を……、迎えるわけには……っ！」
「リゼの理性は、もう、ボロボロだよ」

そう言って、俺はリゼの大きな胸を、両手で再び包み込んだ。

「……な、……見てみろ、な……。これが、私の……、一番、な、……無防備な魅力だ……。な、……その、魅力を……、最大限に、使って……」

リゼは、自らの胸を自慢するように突き出し、俺に触れることを要求してきた。

「……もう、限界だ。な、……早く、次の、場所へ……移動しろ。……ここじゃ、寒くて……、な、……風邪を引く……」

彼女の身体は、快感と寒さで、小刻みに震えている。

「わかった。行こう。次のエリアへ行こう」

「ふふん。……当然だ。この、最高のぬくもりと、……この、熱を……、最後まで、な、……大切にさせてもらうぞ」

俺たちは、水滴を滴らせながら、次の場所、寝室へと向かった。

第三章：愛の告白、そして一つに

湯気と月光を纏ったまま、俺たちは露天風呂から寝室へと移動した。濡れたままの肌が夜の空気に触れ、リゼの身体は小さく震える。それは、高ぶった熱のせいだと、俺にはわかっていた。

「な、……早く。……体温が、急速に低下している。……このままでは、甘えきれない」

リゼは、焦った声を上げた。その声は、甘い吐息が混ざり、かろうじて言葉の形を保っている。

部屋に入ると、俺はすぐに暖房をつけ、リゼを大判のタオルで包み込んだ。

「大丈夫、すぐに暖かくなる」

体を拭きながら、リゼは俺の腕を掴んだ。

「……な。私の、……体を拭くのは……、そこがやれ」

リゼは、濡れたタオルを床に落とし、敷かれたばかりの清潔な布団に、そのまま倒れ込むようにして横たわった。

「……ふむ。これは、最高の場所だ。外部からの干渉もなく、柔らかく、……な、……無防備になった私を、すべて受け入れる」

その言葉と共に、リゼの瞳は、情欲に濡れて、俺を見つめ返した。

俺が布団の横に座ると、リゼはすぐに俺の手を取り、自分の大きな胸に押し付けた。

「な、……まだ、熱が足りない。……確認しろ。……鎧は、完全に解除された。……これが、私の、な、……本当の私だ」

湯上がりで火照った彼女の肌は、今や最高の柔らかさを持ち、俺の手に吸い付くようだ。俺は、その誇り高き「魅力」を、じっくりと、愛おしむように揉みしだいた。

「んぅ……っ、な、……！」

リゼの口から、深い喘ぎが漏れた。

「だめだ……っ、そこは……、な、……敏感すぎる場所だ……。訓練でも、ここだけは……、重点的な優しさが必要だったのに……っ」
「優しさは、もう、たっぷり与えるよ。ここは、もう俺の愛の場所だ」

俺は、彼女の豊満な胸から唇を離し、首筋、そして耳元へとキスを落としていく。リゼは、長い髪を枕に散らし、甘い吐息を荒く繰り返す。

「ふぁ……っ、な、……やめろ……。その、熱は……、私の、な、……理性を、完全に、乱している……っ」

俺は、胸から腹筋へと、ゆっくりとキスを落とし、彼女の身体の曲線に沿って指を這わせた。

「……な、……待て……。次は、……な、……一番大切な場所だ……。……心の準備を……、させてくれ……っ」

リゼは、俺の顔を両手で掴み、必死に理性を取り戻そうとした。その瞳は、涙で潤んでいる。

「リゼは、どうしたい？」

俺は、優しく、しかし有無を言わさぬ声で尋ねた。

「……っ、どう、したい……って、な……。それは、……それは、私に、な、……愛の告白を、させるつもりか……っ？」

「そうだよ。素直に、愛してると言いたい」

リゼは、息を深く吸い込んだ。そして、その長い髪が、布団に埋もれるほどに、頭を激しく左右に振った。

「……あ、……ぁあ……っ！　な、……わかった……。……愛してる……。……私の、すべ

てを……、満たして……っ！」

ついに、リゼは、自分の欲望を「満たして」という言葉に託して、俺に降伏した。

その瞬間、俺はリゼの脚の間に身を滑り込ませた。

湯で温められたばかりの彼女の秘密の場所は、すでに熱く、そして湿っていた。

「んんっ……！　な、……つ、冷たい……っ！　……はぁっ、ひぅ……っ」

リゼの悲鳴のような喘ぎ声が、部屋の中に響き渡る。その声は、か弱く、そしてとてつもなく淫靡だった。

俺は、リゼの白い太ももをそっと撫で上げながら、彼女の顔を見つめた。

リゼは、顔全体が真っ赤に染まり、吊り上がった目は閉じられ、苦しげに歪んでいる。

「……な、……やめてくれ……っ！　そこは……っ、そこは、最高に秘密な場所だ……っ。……許可なく、……っ、入っちゃ……、んんっ、あぁぁ……っ！」

俺が、彼女の秘めた場所を、指先で優しく押し開く。
すると、リゼは、今まで聞いたことのないような、甘く、切実な悲鳴を上げた。
「ぁあっ……！　な、……ふぁあ……っ！　……だめ、だ……っ、もう、……快感が鳴っている……っ！」
彼女の腰が、勝手に持ち上がり、俺の指を迎え入れる。
俺は、彼女の濡れた場所へ、ゆっくりと指を挿入した。
「んんんっ……！　な、……あぁっ、……ひ、ひぅ……っ」
リゼは、口を大きく開け、喘ぎながら、布団の上で身をよじる。
「リゼ……」
「……っ、な……、だ、誰だ、……っ、あ、あぁ……っ、ここは……、な、……姉妹に、憧

れた、私の、秘密の場所だ……っ」

ふと漏れた、彼女の心情。普通の女の子になりたい、という願いが、この極限の快感の中で、素直に言葉となって現れたのだ。

俺は、リゼの胸に顔を埋めた。柔らかく、弾力のあるその感触に、リゼはさらに甘い吐息を漏らす。

「んんっ、な、……いい、ぞ……。……この、温もりを、な、……最大限に、感じて……っ、私を、……完全に、夢中にしろ……っ！」

リゼは、俺の髪を掴み、その大きな胸を、さらに強く俺の顔に押し付けてきた。

その胸の重みと、リゼの荒い吐息に包まれながら、俺は、彼女の秘密の場所を、さらに深く、熱く、刺激した。

「はぁっ……、な、……もう、……っ、だめだ……っ、すべての感情が……っ、溢れ出す……っ！

……ぁあああっ！」

リゼの身体が、弓なりに反り返る。そして、彼女は、俺の胸に顔を埋め、全身の力を使い果たしたように、深い、長い甘い吐息を漏らした。

「……な……、……な、……」

リゼは、ただ甘い吐息を繰り返す。

その吐息は、もう照れ隠しの言葉を含んでいなかった。ただただ、愛と快感に満たされた、一人の女の子の、素直な声だった。

「……愛の、時間、だ」

リゼは、力を振り絞って、そう呟いた。

夜は、まだ始まったばかりだ。

第四章：無垢な甘え、愛のぬくもり

一度、快感の頂点に達したリゼは、全身の力を失って布団の上に横たわっていた。荒い息遣いだけが、部屋の静寂を破る。

「……な……、……っ、すべての、……熱を、……使い果たした……。……この、無力な状態を、……どう、……愛してくれる……つもりだ……っ」

そう強がるリゼの声は、もうさっきのような固い響きはなく、ただ甘い吐息に揺れていた。

俺は、汗ばんだリゼの肌を優しく拭い、清潔なタオルケットをかけた。

「愛し方？　リゼは、ただ愛されていればいい」

「……愛されて、だと……。そんな、甘い言葉は、私の、辞書にはない……っ」

そう言いながらも、リゼは俺の手を掴み、決して離そうとしない。

「……な。だが……、……まだ、私には、……愛を注ぐ場所が、残っている」

リゼは、そう言って、自分の胸に置かれた俺の手に、さらに強く力を込めてきた。

湯上がりと快感で熱を持ったリゼの胸は、今、極度に敏感になっていた。俺が少し指先を滑らせるだけで、彼女の全身がビクッと反応する。

「んんっ……！　な、……そこは、……っ、肌が、薄いエリアだ……っ。……刺激は、……っ、はぁっ、……優しく……っ！」

俺は、タオルケットをそっと剥がし、再びリゼの豊かな胸を、両手に包み込んだ。

「……っ、な……、だめだ……。……今、その、ぬくもりは、……な、……最高感度になっているっ」

俺は、その自慢の「魅力」の頂点、薔薇色の乳首に、そっと唇を落とした。

「んんぅううっ……！　や、め、ろ……っ！　ふ、ふぁ……っ！」

リゼの背中が、大きく反り返る。

俺は、丸く張り詰めた乳首を、優しく舌でなぞった。リゼの体は、敏感な反応でさらに熱を持つ。

「ひぅ……っ、な、……な……っ！　……だめだ……っ、その、甘い、触れ方は……っ、私の、な、……心の壁を……、完全に……っ」

リゼは、両手を伸ばし、俺の頭を掴むと、その大きな胸に、さらに強く押し付けた。

それは、「もっと深く、この快感を」という、無言の命令だった。

俺が乳首を甘く吸い上げると、リゼの喘ぎ声は、いよいよ悲鳴に近くなる。

「ぁああっ……！　ふ、ふん……っ！　この感覚が……っ、露呈、して、いる……っ！　……な、……もう、理性が……、持たない……っ」

リゼは、混乱の中で、ふいに、甘い吐息と共に言葉を漏らした。

「な、……ココアの、抱き枕みたいだ……っ。……あぁ、……っ、ずっと、……この、優しさに……、な、……包まれて……っ」

彼女が、心の底で求めている「普通の女の子」の甘えが、極限の快感の中で露わになる。

俺は、吸い上げる行為を止め、リゼの顔を見上げた。

リゼの瞳は、潤んでいて、涙が頬を伝っている。しかし、その表情は、安堵と喜びで満ちていた。

「リゼの胸は、可愛いものが大好きなんだね」

俺がそう囁くと、リゼの顔は、さらに真っ赤になった。

「っ……、ば、馬鹿！　な、……何、を、言っている……っ！　そ、その、……秘密を、……っ、口にするな……っ！」

「隠さなくていいよ。可愛いものが好きなリゼも、すごく可愛い」
「……っ、な、……」

俺は、リゼの胸元を優しく撫でながら、もう一度、乳首にキスをした。

「……っ、んぅ……っ、あ、あぁ……っ！　……ぬくもりだ……っ！　な、……最高の、愛情……っ！」

リゼは、まるで甘いミルクを飲む子供のように、俺の行為を貪った。
リゼは、この行為がもたらす極限の快感と、同時に感じている「誰かに甘えている」という感覚に、完全に理性を手放していた。

「な……っ、はぁっ、……っ、だめだ……っ、もう、……体が、勝手に……っ！　……ふ、ふぅ……っ」

リゼの身体は、再び激しく震え始める。
リゼの喘ぎ声は、途切れ途切れの固い口調から、純粋な甘えの嬌声へと変わっていく。
「あ、ぁん……っ、な……っ、もっと……っ、優しくして……っ！　……私を、満たして……っ！」
「優しくして」「満たして」――リゼの口から、こんなに素直で無垢な言葉が出るとは、誰も想像できないだろう。
乳首から、腹部へとキスを落とす。彼女の引き締まった腹筋は、快感で硬く緊張していた。
「……な、……だめだ……っ。……もう、限界を……っ、超える……っ！　……ひぃっ、あぁあぁっ！」
リゼの全身が、再び大きく跳ね上がる。胸の感度は、もはや限界を超えており、わずかな刺激も、全身を貫く雷鳴となる。
俺は、リゼの身体を抱きしめ、熱い吐息をその首筋に浴びせた。

「リゼは、本当に可愛いね。こんなに素直になれるなんて」
「……っ、う、うるさい……っ！　……な、褒めるな……っ！　……これは、……愛の、証明だ……っ！」
そう強がるリゼの顔は、快感で涙と汗に濡れ、その表情は完全に蕩けていた。
リゼの長い髪をそっと撫で、俺は囁いた。
「この後、もっとすごい『可愛いもの』をあげるよ」
リゼは、最後の理性を振り絞って、俺の瞳を見つめた。
「……な、……なんだ……っ？　……どんな、ぬくもりだ……っ？」
「それは、リゼが一番欲しいものだよ」
そして、その後の二人の時間は、甘く、激しく、夜明けまで続いた。リゼは、その夜、何

度も「鎧」を脱ぎ捨て、誰にも見せたことのない、甘えん坊で可愛い、素の自分を俺に晒し続けたのだった。

第五章：愛の終着点、満たされた夜

第四章の激しい「愛のぬくもり」の後、リゼは俺の腕の中で、身を丸めていた。肩で浅い呼吸を繰り返す彼女の肌は、まだ熱を帯びている。

「……な……。……ふぅ、……この時間は……、まだ、……継続中……なのか……？」

リゼは、顔を上げずに、か細い声で尋ねた。

「当たり前だろ。夜は、まだ長い」

俺は、リゼの頬に何度も優しいキスを落とす。

「んんっ……、な、……やめろ……っ。……もう、理性の壁は……、完全に、溶けて、いる……っ」

リゼは、自分の胸を撫でる俺の手を掴み、その指先に、再び自分の敏感な乳首を押し付けてきた。

「この、最高感度は……、な、……そこの、特権だ……っ。……十分に、な、……愛して……っ」

俺は、彼女の命令に従い、乳首を指で優しく弾き、そして甘く吸い上げる。

「んぅううううっ……！　な、……ひぅ……っ、秘密の場所……っ！　……あぁ、……この、甘い愛は……、私の、心を、……破壊する……っ！」

リゼは、大きく目を見開き、恍惚の表情を浮かべる。

そして、俺は、彼女の濡れた場所へと、ゆっくりと自分の熱を合わせた。

「リゼ、入るよ」
「な、……待て……っ！　……ぬくもりに、備えろ……っ！」

リゼは、最後の理性で、そう警告を発するが、その声は、もう切実な喘ぎに変わっていた。
ゆっくりと、そして確実に、二人の身体が一つになる。

「んっ……！　あぁぁ……っ、な、……愛……っ！　……ふぁ……っ、ひぅ……っ、……融合完了……っ！」

リゼの体は、待ち望んだ融合の快感で、全身が痙攣する。

「……な、……ぴったりだ……っ！　……そこと、私、……最高の、愛の場所だ……っ」

彼女の奥から響く、甘く熱い声が、俺の体をさらに興奮させた。
俺は、リゼの顔を覗き込み、唇を激しく重ねた。深いキスと、甘い吐息の交換。

「んんんっ……、ちゅっ……、はぁ……っ、……な、……息が、足りない……っ！　……幸福に、溺れるぞ……っ！」

リゼは、キスで息継ぎができない状態を、固い言葉で表現するが、その口元からは、**「離れたくない」**という、素直な気持ちが漏れていた。

体内で結合したまま、俺が腰を動かし始めると、リゼの喘ぎ声は、いよいよ制御不能なものになった。

「あぁああああああっ！　……な、……だ、だめだ……っ！　……最高で……っ、愛して……っ！　……っ、快感が、多すぎる……っ！」

快感が多すぎて、理性の防壁は、音を立てて崩れ去っていく。

「ふぅ……っ、な、……あ、そこ……っ！　深すぎる……っ！　……心に、……っ、直接、届いている……っ！」

リゼは、俺の背中に両手を回し、必死にしがみついた。その細い指は、俺の背筋を強く掻きむしる。
俺は、リゼの耳元で囁いた。
「リゼ、気持ちいいか？」
「……っ、な、……命令だ……。……っ、も、もう、限界だ……っ！　……そこも、……私の中で……っ、すべてを、注ぎ込め……っ！」
リゼの顔は、恍惚と苦痛が混ざったような表情で、俺を見つめ返した。その瞳の奥には、すべてを俺に委ねるという、深い愛情と信頼が宿っている。
俺は、最後の力を込めて、リゼの奥深くまで突き上げた。
「んんんっ！　あぁぁああああああああっ！　……幸福が……、鳴り響いている……っ！……全快感が……っ、集中する……っ！　……ふぁああああぁぁぁぁっ！」
リゼの身体は、再び弓なりに反り返り、全身を激しく痙攣させながら、快感の奔流に呑み

込まれた。その瞬間、俺もまた、堰を切ったように熱いものを彼女の奥深くに注ぎ込んだ。

「ッ、はああ！……っ、リゼ……っ、愛してる……っ！」

リゼは、俺の熱を全身で受け止めながら、再び深く、長い甘い吐息を漏らした。

「……な、……っ、愛の、終着点だ……。……最高の、愛だ……っ」

しかし、その快感は、そこで終わらなかった。

俺は、彼女の身体がまだ熱を帯び、敏感になっているのを感じて、少し動きを緩めた後、すぐに再び、激しく腰を揺らし始めた。

「んっ……！？　な、……追撃……っ！？　……だめだ……っ、体が、動かない……っ！……あぁ、……っ、ふぅ……っ」

快感の余韻の中で、休む間もなく続く刺激に、リゼの身体は、抗うことなく順応してい

く。

二度目、三度目と、俺がリゼの中で大量に、何度も何度も絶頂を迎えるたび、リゼもまた、その熱い衝撃を受け止め、より激しい快感の連鎖に飲み込まれていった。

「ひぃっ、……っ、な、……もう、何回目だ……っ！　……尽きないのか……っ！　……あぁぁぁぁっ！　……この、甘い愛の暴力……っ！」

彼女の理性は完全に消え失せ、ただ快感だけが彼女を支配していた。

何度も何度も、深く結合し、キスを交わし、甘い吐息を分け合った。

夜が明け始める頃、二人は汗だくになりながらも、結合したまま、ただ抱き合っていた。

リゼの体は、満足感と疲労で、すっかり脱力している。

「……な……、……」

リゼは、俺の胸に顔を埋め、小さな声で呟いた。

「……な、……最高だった……っ。……この、愛の、制圧は……、史上最強だ……っ」

俺は、リゼの髪を撫でながら、微笑んだ。

「俺もだよ、リゼ。最高に気持ちよかった。こんなに夢中になったのは初めてだ」

「……っ、愛、完遂だ……。……次の約束は……、な、……今すぐ、計画……、しないと……」

そう言って、リゼは再び深い甘い吐息を漏らし、俺の胸に寄りかかって目を閉じた。

部屋の窓から差し込む朝の光が、二人の体を優しく照らしている。昨夜の激しい愛の跡だけを残し、リゼは、もう二度と離れないとばかりに、俺にしっかりと抱きついていた。

第六章：朝露に溶ける愛（エピローグ）

障子越しに差し込む朝の光が、二人の体を優しく照らしていた。部屋には、まだ熱と、夜通し続いた激しい愛の、甘い香りが残っている。

リゼは、俺の腕を強く抱きしめたまま、眠りから覚めていた。その顔は、ほんのり桃色に染まり、長い黒髪は、汗でわずかに額に張り付いている。
普段の、誰にも隙を見せない姿からは想像もできない、完全に無防備で、満たされた表情だった。

「んんぅ……」

リゼは、小さく甘い声で唸り、俺の胸に額を擦り付けた。

「……な……、……ぬくもりが、……完全に、充満している……。……もう、一歩も、動けそうに、ない……っ」

その声は、まだ深い甘い吐息に揺れており、昨夜の激しい喘ぎの余韻を物語っている。
俺は、リゼの頬を優しく撫でた。

「疲れただろ？　もう少し寝てていいよ」
「……命令を、却下する……っ。……甘えたい気持ちは、最高レベルだ……。……この、温かい、包囲網から……、な、……一秒たりとも、離れない……っ」

彼女の「最高レベル」の甘えとは、俺を絶対に手放さないという、純粋な執着に変わっていた。
俺は、彼女の首筋にキスを落とす。彼女の体温は高く、昨夜の愛の熱をまだ放出している。

「んぅうっ……！　や、……っ、やめろ……っ。……愛の、追撃は、……な、……禁止だ……っ」

そう言いながらも、リゼは、キスを避けようとはせず、かえってその首を伸ばし、より深い刺激を求めているようだった。
昨夜、俺が何度も彼女の奥深くに愛を注いだ記憶が蘇る。彼女の身体は、その熱い愛情を、細胞の隅々まで受け入れたことを知っている。

俺が、シーツの下で、そっと彼女の腰に触れると、リゼの身体がビクッと跳ねた。

「ひぅ……っ！　な、……っ、感じた……っ！　……だめだ……っ、最深部が……っ、まだ、疼いて、いる……っ」

快感の核が、朝の微かな触れ合いにすら敏感に反応しているのだ。

俺は、彼女の腰を優しく抱き寄せ、シーツの中で、昨夜の愛の残滓を確かめるように、さらに深く触れた。

「んんっ……！　……あ、あぁ……っ！　余熱で……っ、体が、勝手に……っ！　……な、だめだ……っ、もう、一発で……っ、理性が、蒸発する……っ」

リゼは、顔を赤くして、小さな喘ぎを繰り返す。その瞳は、まだとろけており、理性を失う直前の、最も色っぽい表情をしていた。

俺は、その熱と濡れを感じながら、彼女の顔を引き寄せ、深く、舌を絡ませるキスをした。

「ちゅっ……んんんっ……、はぁ……っ」

リゼは、キスをしながら、何度も甘い吐息を俺の口の中に送り込んできた。それは、昨夜の甘い愛を、もう一度味わい直そうとする行為だった。

「……っ、な、……愛してる……っ。……命令だ……。……私の、……愛の、包囲網から……、な、……一生、逃げるな……っ」

その言葉は、もはや固い命令ではなく、一人の女性の、切実で甘い誓約だった。リゼの冷たい鎧の奥に隠されていた、可愛いものが大好きで、誰よりも甘えたいという無垢な心が、今、完全に俺に降伏した瞬間だった。

俺は、その誓いを受け入れ、リゼを抱きしめる腕に、さらに力を込めた。

二人の朝は、甘い吐息と愛の言葉、そして、満たされた身体の温もりと共に、ゆっくりと始まっていく。リゼの「鎧」は、この温泉で完全に溶け去り、彼女は、ただ一人の愛しい女性として、俺の隣にいるのだった。

～完～